

スペイン語における汎イスパニア主義と多様性

——「汎用スペイン語」研究のための考察——

江澤 照 美

El panhispanismo y la variedad en el español

—para el estudio del “español panhispánico”

Terumi EZAWA

1. はじめに

本稿は江澤 (2019a) に続く、「汎用スペイン語」¹⁾についての論考である。まず、「汎用スペイン語」をスペイン語圏で使用される多種多様の言語バリエーションとは対極に位置づけられスペイン語圏全域でおおむね相互理解が可能とされるスペイン語、と定義づける。特定の地域内でのみ通用する言葉づかいの使用は時として円滑なコミュニケーションを妨げる。かかる事態を回避するために話者自身がこれは地域限定的でないと判断して選ぶ言葉の総体が汎用性を持つ言語と考えられる。それゆえ「汎用スペイン語」はスペイン語圏のどの地域のスペイン語とも近似しているとはみなされない。また、どの地域においても大体通じるが、多くの人々に通じやすい言葉づかいには往々にして人口に膾炙した口語や俗語が含まれる。そこで、「汎用スペイン語」はスペイン語母語話者から言語規範を逸脱している、とか、自分の地域のことばではないと判断されるような事態が生じる²⁾。

「汎用スペイン語」は、スペイン語圏全域を商業ターゲットとしてメキシコやプエルトリコで制作された映画やドラマの吹き替え用言語 *el español neutro* として1960年頃からその存在が意識されるようになったが、スペイン人には違和感が残る言語であり、国内で吹き替え版を制作するようになって以来スペインでは次第に使われることがなくなった³⁾。

しかし、1990年代以降インターネットが世界的に普及する中でスペイン王立言語アカデミア (以降、RAE と略記) はいち早く Web サイトを開設するなどネットを積極的に活用して世界に情報を発信し始めた。その広

報活動の中で特筆すべきは、RAE がスペイン以外のスペイン語圏各国のアカデミアとの連帯やスペイン語の地域バリエーション尊重の姿勢をアピールするようになったことであった。同じ90年代にはスペイン語教育やスペイン語圏文化の普及を目的としてセルバンテス協会が設立され、まもなくコンテンツの充実した Web サイト Centro Virtual Cervantes を立ち上げた。RAE と同様にインターネットを活用してスペイン語圏としての存在をアピールし、その中で言語教育や文化普及活動の発信を始めたのである。RAE とセルバンテス協会の共通点はネットの積極的活用だけではなく、どちらもスペインが活動の中心にいるが、スペインだけでなくスペイン語圏を前面に出して世界に情報発信していることにある。このようなスペイン語圏の連帯関係は汎イスパニア主義 (Panhispanismo) と呼ばれる⁴⁾。

1990年代以降に RAE やセルバンテス協会が取った言語政策の詳細については次章に委ねるとして、ここで日本のスペイン語教育に目を転じる。上述したように現在の RAE やセルバンテス協会はスペインというよりは言語や文化の多様性に富むスペイン語圏のイメージを前面に出して広報活動をおこなっているが、日本のスペイン語教育の場でも同様のスペイン語圏紹介がされているだろうか。筆者の限られた経験から述べると、筆者の学生時代よりもイSPANアメリカ出身の教師やテキストの中でイSPANアメリカの社会文化紹介が増えたような印象を受ける。にもかかわらず、多様性に富む一方でスペイン語という一つの言語でつながるスペイン語圏の姿を日本のスペイン語教育では必ずしも十分に紹介しきれていないように思われる。イSPANアメリカを取り上げることが以前よりは増えたとはいえ、日本では依然としてスペイン関係の情報の方が多いと感じる。

そこで本稿では現在の日本のスペイン語教育界におけるスペイン語圏の紹介のされ方や内容などを検証し、学習者がスペインのみならずスペイン語圏の人々と交流するために日本のスペイン語教育が指向すべき方向性についてささやかな提言をおこなう。その提言は江澤(2019a)で提示した「汎用スペイン語」の教育的応用という課題にさらなる進展をもたらすことになるはずである。

2. スペイン語圏と汎イスパニア主義

日本のスペイン語教育におけるスペイン語圏の扱いを論じる前に、近年

のスペイン語圏の実情とその広報の概要を述べる。その方法として、RAE やセルバンテス協会が現在までにおこなっている様々な活動を汎イスパニア主義と言語の多様性という観点から分析を試みる。

2.1. RAE

前章で述べたように、1990年代以降のRAEはスペイン語圏内の言語的な多様性を尊重しつつも同時にスペイン語圏としての連帯をアピールする汎イスパニア主義の姿勢を明確に打ち出した。RAEは自らもメンバーであるスペイン語アカデミア協会（以降、ASALEと略記）との連帯の姿勢や3年に1度開催されるスペイン語国際会議⁵⁾など、スペイン語の存在感を世界に示す規模の大きな学術的活動をそのWebサイトを通じて世界に発信した。正しさや品格を保った正統なスペイン語の保持は設立当初からのRAEの方針である。しかし、1990年代より以前のRAEはアメリカ大陸のスペイン語圏諸国との連帯をたいして強調しているようには思われなかった保守的な学術団体であった。そのRAEがスペイン語圏内の言語的多様性を尊重しながら同時に汎イスパニア主義を標榜するという大きな方向転換をおこなったのである。かくしてスペイン語の言語規範はもはや単一のものではなく、スペイン語圏各国に存在するものになった。

また、言語において規範と用法(Norma y uso)は相対する概念であり、以前のRAEが関心を寄せていたのは言語規範であるが、90年代以降のRAEは言語の多様性にも目を向け、広大なスペイン語圏の話者が生み出す多様な用法にも関心を寄せるようになった。

ここでRAEとASALEとの関係についても触れておきたい。RAEは1713年に設立されているが、その他のスペイン語圏各地の言語アカデミアも19世紀から次々に設立され、1951年にはスペイン語圏の連帯と言語的な多様性の両方を標榜するASALEが発足した⁶⁾。すなわち、RAEと他のスペイン語圏諸国の言語アカデミアとの連帯関係は1990年代より以前から存在していたが世界に向けてそれが広く発信されるようになったのは、インターネットの時代以降のことである。ASALEもものにWebページを開設し、“Unidad en la diversidad”をモットーとして⁷⁾、RAEと同じくスペイン語圏の多様性と汎イスパニア主義に則った活動を世に発信している。汎イスパニア主義についてはRAEよりもその姿勢が明確に打ち出されている。

以上のような RAE の方向転換は比較的早期にその刊行物に反映された。2005年に書籍として出版され、RAE の Web ページ内にもそのコンテンツがある *Diccionario panhispánico de dudas* はその紹介文によると、現在の教養的規範という観点からスペイン語の用法が提示する最もありがちな正書法・語彙・文法という言語学的な疑問に答えることを目指している⁸⁾。

そして、*Ortografía* 2010年版は1999年版では記述が乏しかったイスマノアメリカ諸国の規範や実例を豊富に採用し、書籍としてのボリュームまで様変わりするほどであった⁹⁾。スペイン語圏各地の言語規範について多くの例とともに記述された正書法の刊行は貴重な言語資料であったが、地域によって言語規範が異なることが明確になったことにより「汎用スペイン語」具体化の探求は困難さを増すことになったとも言える。

2.2. セルバンテス協会

1991年にスペイン語教育とスペイン語圏文化の普及のために設立されたセルバンテス協会も RAE と同じく、内容の充実した Web サイト *Centro Virtual Cervantes* (以降、CVC と略記) を開設してスペイン語圏の言語と文化を世界に発信し続け、スペイン語圏が持つ言語や文化の多様性と汎イスマニア主義の推進に寄与してきた。

ここでは CVC の言語部門¹⁰⁾の中で紹介されたいくつかのスペイン語に関する刊行物に注目したい。*La influencia económica y comercial de los idiomas de base española* や *El valor económico de la lengua española* そして *El español, lengua global. Economía* はいずれも世界の中でのスペイン語の地位を特に経済面から論じている。スペイン語が存在感を示すのは経済だけではなく、*El español, lengua para la ciencia y la tecnología* のような科学技術分野における影響の分析もある。世界各国のスペイン語教育の最新事情やセルバンテス協会の活動詳細を知るには1998年から刊行されている年報 *El español en el Mundo* が役立つ。2000年・2014年版には日本のスペイン語教育事情報告も掲載されている¹¹⁾。

上記の *El español en el Mundo* の中で、スペイン語圏の人口・スペイン語教育・経済・ネットの世界・科学技術や文化などの分野における世界的な位置づけを独自調査ほか世界の信頼しうる情報ソースから得たデータをもとに毎年分析報告しているのが *El español: una lengua viva* である。2012年版より CVC の中で *El español en el Mundo* とは別のコンテンツとして掲載

されるようになった。わずかではあるがその内容を紹介する。本稿執筆時に最新版 *El español: una lengua viva* 2019 が発表された。プレス発表の数日前に Facebook のページなどで今年度の年報公表を告知し、同時に主要なデータを記したプレゼンシートを数枚事前公表するなど、この年報の公表がセルバンテス協会の汎イスパニア主義的な広報戦略の一環であることをうかがわせる。この最新版の第 1 章「数字でみるスペイン語」冒頭の概要によると、2019 年にスペイン語母語話者は約 4 億 8300 万人でこれは中国語に次いで世界第 2 位である。また、母語話者数に非母語話者（母語話者とは呼べない限定的な語学能力保持者および外国語として学ぶ学習者）数を加えたポテンシャルユーザーは 5 億 8000 万人を超える。この数字は英語、中国語に次いで世界第 3 位である¹²⁾。

近年学術刊行物の電子化が進み、またユーザーを制限せずアクセシビリティも高いこの年報のような資料が利用可能になり、ネットが存在しなかった時代の資料探索とは隔世の感がある。*El español: una lengua viva* は毎年更新されているため、過去のデータとの比較によりスペイン語話者のマンパワー増加を全世界に印象づけるのに貢献している。

2.3. その他の機関の動向

2.1. や 2.2. に見られるような RAE やセルバンテス協会の動きは一見「汎用スペイン語」とはあまり関係がなさそうに思える。しかし、言語表現が必ずしも同じでない他のスペイン語圏話者との言語・文化的交流により言語的多様性の尊重と同時に円滑な相互交流の必要性も意識され、結果として意思疎通を図りやすい表現への関心が高まり、スペイン語圏の国際学会で言語の専門家がこのテーマを取り上げることも増えてきた¹³⁾。

語学能力評価においてはスペイン語の多様性や汎用的表現のあり方がより重視される。ただし、問題作成が機密保持の必要な業務であるため、スペイン語の語学能力を測る DELE や SIELE における基準の詳細を知るとは容易ではない。セルバンテス協会が公開している DELE と SIELE の相違点を説明した図表¹⁴⁾では「スペイン語の多様性に対する対応」に関して、DELE は“Sí, sobre todo a partir del B1”、SIELE は“Sí, obligatoriamente, en todo el examen desde su concepción”と書かれている。二つの試験におけるこのような対応の差は興味深い。DELE はセルバンテス協会が主体となり、他方 SIELE はメキシコ、アルゼンチンの教育機関も協力している¹⁵⁾。

イスパノアメリカ諸国の参加は試験における言語の多様性への対応を促進するようである。DELEも将来多様性への対応をより進めていくのか現状維持が続くのか今後の動きを見守りたい。

最後に、スペイン語の多様性と汎イスパニア主義へのスペインのスペイン語教育界の関心について指摘しておく。外国語としてのスペイン語教育学会(ASELE)の2016年度国際会議のテーマは「第二言語／外国語としてのスペイン語教育における汎イスパニア主義と多様性」であった。ただし、研究者の現状認識は進んでいるものの、スペインでも外国語としてのスペイン語教育への具体的な応用までには至っていないという印象を持った。巻頭の論文7本が会議のテーマに関わるものであり、それぞれ興味深い内容の論考であったが、スペイン語の汎用性について筆者が追究している教育分野への応用を具体的に試みた研究は見いだせなかった。ただし、スペイン語の多様性を複数の地域の詳細な使用例により分析した Regueiro Rodríguez (2017) には多くの示唆を得た¹⁶⁾。

以上RAE、ASALE、セルバンテス協会がスペイン語の多様性と汎イスパニア主義を併せ持った言語政策・方針を推し進め、1990年代以降その活動の促進のためにネットを積極的に活用してスペイン語圏全域の広報を戦略的に実施している状況を概観した。次章では日本のスペイン語教育の世界に目を転じ、自国の言語・文化ではないスペイン語やスペイン語圏の文化の日本での伝え方について検証を試みる。

3. 日本のスペイン語教育における「スペイン語圏」

3.1. 教育機関によるスペイン語圏の紹介と学生の選択

日本のスペイン語教育におけるスペイン語圏の現状紹介の傾向を把握するために、まず教育機関による広報に着目した。日本ではスペイン語の主要教育機関は大学である。高等学校でスペイン語を開講しているところは非常に少なく、文部科学省(2019)¹⁷⁾によると、英語以外の外国語の科目を開講している高等学校などは平成30年5月1日現在677校で、スペイン語が開講されているのはうち96校に過ぎない。高大連携が叫ばれる昨今の大学教育の世界であるが、スペイン語を科目として開講している高等学校の情報も容易には得られないのが現状である¹⁸⁾。最も開講数が多い言語は中国語で、韓国・朝鮮語、フランス語に続きスペイン語は第4位である。

日本では大学入学前にスペイン語学習経験を持つ高校生が少なく、大多数が英語のみを外国語として学んでいるだけなので、大学の授業選択でスペイン語履修を勧める場合、初習者であることを前提にスペイン語やスペイン語圏の説明がおこなわれる。英語以外の他の外国語も事情は同様である。日本でスペイン語を学ぶ意義についての説明の典型例として、筆者の勤務大学である愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻が大学公式 Web ページに掲載している文章を以下に引用する。

実践的なスペイン語力およびスペイン語圏とブラジルに関する専門知識を修得し、ポルトガル語も学べる

スペイン語は世界20の国・地域で使われ、その人口は4億人。また、ポルトガル語を公用語とするブラジルの人口は2億人超。日本国内では約28万人のスペイン語・ポルトガル語圏出身者が暮らしており（ブラジル人が20万人）、両言語の重要性は国際社会だけでなく地域社会の中でも高まっています。本学のスペイン語圏専攻では、こうした社会のニーズにも対応できるよう、実践的なスペイン語力およびスペイン語圏やブラジルに関する専門知識をみにつけ、ポルトガル語も修得することができます¹⁹⁾。

愛知県立大学のスペイン語圏専攻はスペイン語を専攻できる全国でも数少ない教育機関である。上記の紹介文のあと1年次から4年次までの学びの内容や卒業後の進路、在学中の留学やインターンシップ経験者の紹介、その他の在学生による短い紹介が続く。国内でスペイン語専攻学科を持つ他大学でもその Web ページで紹介される内容は大体似通っていて、どこの大学の紹介ページでもスペイン語が話される地域としてスペインよりもスペイン語圏の存在が前面に押し出される。この紹介の仕方は汎イスパニア主義的とも言えるが、概ね妥当と考えられる。なぜなら、スペイン語の世界における優位性を述べるのに最も適していると思われるのがスペイン語圏の話者数の多さであるからだ。前章で紹介した *El español: una lengua viva 2019* のデータによると、スペイン国内のスペイン語話者は約4600万人で、この人口分布をわかりやすく例えると、スペイン語圏の人間10人のうち1人だけがスペイン人で残り9人はそれ以外の国々（大半はイspa

ノアメリカ人)ということになる²⁰⁾。学生にクイズ形式で答えてもらおうとスペイン人は10人中3人ぐらいという答えがよく返ってくるが、現実にはスペイン人の全体に占める割合はもっと少ないのである。

本学スペイン語圏専攻の紹介文にはポルトガル語圏であるブラジルやポルトガル語学習への言及も必ず入るが、これは国内の他地域に比べて外国籍在住者が多い愛知県内の大学らしい特徴と言えよう。

大学が提供するこのようなスペイン語履修のすすめの情報を学生はどう受け止めているだろうか。GIDE (2012) は日本のスペイン語教育改善のためのアンケート調査をまとめた報告書である。協力大学は40校に及び、その多くは選択または選択必修の第二外国語としてスペイン語を開講している。そのような大学の履修者はスペイン語専攻学生に比べて留学やキャリア形成が必ずしも語学学習の動機となりえないことが予想される。

実際、アンケート冒頭の質問 [A] 「スペイン語を勉強する理由は？」に対する回答には意外性がなく、アンケート結果により想定が裏付けされた形になった²¹⁾。質問 [A] に対する最多の回答は A9 「スペイン語は世界で最も話されている言語の一つだから」(22.61%) であり、続いて多かったのが A5 「音楽・スポーツ・映画・文学・建築・歴史・食べ物などのスペイン語圏の文化に興味があるから」(18.94%)、A4 「先生・親・友人に勧められたから」(13.44%)、A10 「スペイン語は日本人にとって易しいと言われたから」(12.67%) である。学習者自身が大学入学前にスペイン語圏やスペイン語と何らかの関わりがあることはまれなようで、A1 「スペイン語を話す国に住んでいたことがある」、A2 「以前勉強したことがある」、A3 「自分自身がスペイン語圏出身である」を選んだ学生は少ない。また、第二外国語としての学習者が回答者の大半を占める調査なので、学習後の活動につながる A6 「休暇中にスペイン語圏の国に行きたいから」、A8 「仕事に必要だから」、A9 「将来仕事に役立つと思っているから」の回答率も低かった。スペイン語が世界で最も話者数の多い言語の一つであることを学生たちはいつ知ったのか。大学からの情報提供によるものか、あるいは高校でそう教わったのか。筆者自身は中学生の時にそれを知ったが学校や先生から教わったのではなく知るきっかけは別にあった。高校時代にどの程度スペイン語圏について世界史の授業などで話を聞いたか身近な学生に何度か尋ねたことがあるが、どの学生も世界史でスペイン語圏のことはあまり習った記憶がないと答えている。GIDE (2012) で A9 の回答が多いの

を見ると、大学での学びに興味を持つ高校生にスペイン語圏の広さを教えるのはスペイン語履修者を増やすのに有効らしい。筆者自身の学習動機も同じ A9 である。

日本のスペイン語教育関係者は、初習学習者にスペイン語学習を勧める際に、スペイン一国に言及するよりも学んだスペイン語を活用しうるスペイン語圏の広大さをアピールする傾向がある。このことは筆者自身も経験的に自覚していたが、初習学習者も世界の多くの国で使われるスペイン語に肯定的なイメージを少なからず持っていることを GIDE (2012) の調査は明らかにしている。

3.2. 教室でのスペイン語圏紹介—初級文法テキストにおける扱い

3.1. で確認したように、日本の大学で学生がスペイン語学習を開始する段階では、スペイン語は多くの国で使える言語として印象づけられている。それはスペイン語の汎イスパニア主義的な特性が初習学習者の印象によい意味で残っていることになる。他方、初習時にスペイン語の多様性について知識を持っている学生はそれほど多くない。おそらく日本の多くのスペイン語教師は筆者と同様の経験をしているはずと確信するが、中米のスペイン語圏諸国の日本語での名称を知らない・ブラジルがスペイン語圏だと思っていた・スペイン国内の多言語状態について知らない、という学生は特に珍しい存在ではない。日本のスペイン語教育では授業活動を通してスペイン語圏の言語の多様性を学生に学ばせる必要がある。

日本の大学のスペイン語の授業でスペイン語圏や圏内の言語がどのように教えられているかその傾向を知るために、授業時に使用されるスペイン語テキストの内容を分析することにした²²⁾。本稿冒頭で述べたように、近年日本で発行されている入門レベルのスペイン語テキストはそれ以前の時代のテキストよりもイスパノアメリカについての言及が増えてきたが、一般的にはまだスペインやスペインのスペイン語が主として扱われているという印象がある。スペイン語のテキストなのでスペインについて何の言及もないテキストはおそらくないと思われるが、イスパノアメリカの言語や文化・社会について日本のテキストでどの程度、どのように言及されているか知ることを今回の調査の目的とした。

対象としたのは日本で出版され、主として大学の授業での利用を前提としたスペイン語入門レベルのテキストである。すなわち練習問題の解答が

巻末などに掲載されておらず、大学外の書店では通常販売されていない。近年のテキスト事情を知ることが目的であるため、最近5年間に初版が発行されたテキストに調査対象を限定した。日本で発行されるスペイン語テキストの中には改訂版として出版されるものがあるが、改訂版は初版の内容が若干改変されることはあっても大幅な内容変更はないのが普通である。そこで最近5年間に出版された新刊でも初版がそれ以前に出版されているものは調査対象から除外した。以上の条件で筆者が入手できたのは6社の出版社から刊行された計27冊のスペイン語入門レベルテキストである²³⁾。テキスト一覧は本稿巻末の表を参照してもらいたい。

これら27冊のテキストにおけるスペイン語圏の扱いの傾向を述べる前に、本稿が調査対象としたテキストの欠点をあげつらう意図はないことをお断りしておく。イスパノアメリカの記述が少ない、あるいはほとんどスペインしか取り上げていないテキストがあっても、それはテキストの著者の必要性によってそのような特徴を持っているというだけのことであり、そのテキストが欠点を持つことを意味しない。本稿のテキスト調査の目的はあくまでも日本のスペイン語教育の傾向を知ることにある。

3.2.1. 地図

27冊中25冊のテキストにスペイン語圏の地図が掲載されている。場所は表紙裏や裏表紙裏が大半である。出版社が同じであると使われる地図も掲載位置も同じになる場合があるようだ。25冊中スペインの地図のみ掲載されているのは1冊だけで、他はすべてスペインとイスパノアメリカの両方を掲載している。さらにヨーロッパの地図と各国のスペイン語名称も掲載しているテキストも2冊ある。同じ出版社から刊行されている。掲載されても通常は目立たない赤道ギニアの地図をその周辺地域も含めて掲載しているテキストも1冊ある。

ほとんどのテキストがイスパノアメリカの地図を掲載しているが、その多くはスペインとイスパノアメリカの表示サイズが同一である。大西洋をはさんで両者を掲載して大きさを対比し、かつスペイン語圏全体をも示しているテキストは3冊だけでうち2冊の出版社は同一である。残り1冊はスペインについて国名と首都名のみ記し、イスパノアメリカ各国についても同様の表記をしている。多くのテキストではスペイン国内の主要都市名や自治州、主要河川名まで示されているが、イスパノアメリカについては

同様の記載をしておらず、扱いのアンバランスが気になった。

3.2.2. アルファベット Y の読み

アルファベットの Y は *i griega* と読まれていたが、RAE (2010) よりイスパノアメリカで使われる *ye* という読み方に変更された。I *griega* と読むことに慣れ親しんできたために新しい読み方を受け入れられないスペイン語母語話者は少なくないようで、筆者が個人的にイスパノアメリカ出身の母語話者何名かに聞いたところ全員が *ye* (ジェ) と読むことに否定的反応を見せた。しかし、日本のスペイン語テキストでは *ye* (ジェ) の読みを *i griega* と併記したり、*ye* のみ記載するテキストが大半である。すべてのアルファベットの読み方を記載していないテキストは 2 冊あった。2010 年からの変更を説明したテキストは 1 冊だけである。また、*i griega* のみしか記載していないテキストが 2 冊あったが、いずれも著者の中にスペイン語母語話者が含まれている。筆者も学生時代に *i griega* で習った世代であるが、日本人にとっては母語話者ほど大きな抵抗を感じる変更ではないので、日本のテキストでは *ye* への変更がスムーズに行われているのだろうか。

3.2.3. イスパノアメリカでの *vosotros* 不使用

主格人称代名詞 *vosotros, -as* をイスパノアメリカで使わないことに言及していないテキストは 17 冊あった。言及しているテキストのほとんどは *ustedes* での代用を示唆している。「但しラテンアメリカでは *tú, vosotros* の代わりに *usted, ustedes* を使うことが多い」と説明しているテキストがあるがこの記述は誤解を招くように思える。また「*vosotros, -as* はラテンアメリカでは使いません」とだけ説明されているテキストもあった。間違いではないが *ustedes* での代用にも言及すべきではないだろうか。

あるテキストで、掲載した動詞すべてについて *vosotros, -as* の活用表の文字だけ薄文字にし、「*vosotros, vosotras* はスペインでのみ使います」と書かれた説明文が目をついた。この説明文は、イスパノアメリカでは *vosotros* を使わないと説明する他の多くのテキストの視点がスペイン寄りであることを気づかせてくれた。このテキストについてはそうではなく、スペイン語圏の中でスペインだけが特別という捉え方をされていて、こちらの説明のほうがスペイン語圏の人口比の現実に即している。

個人的には vosotros, -as のイスマノアメリカでの不使用に言及がないテキストが多いのが気になった。スペイン語ではこの待遇形式が動詞の活用形選択に影響を与えるので、学生にスペイン語圏全域の人々との交流を望むならば、テキストに言及がなくても教師は説明したほうがよいと思う。

3.2.4. 講読または会話・スキット

文脈のある読み物がないと思われるテキストは3冊あった。その他のテキストはなんらかの短い講読用文章または会話のスキットがある。各課の文章にストーリー性や意味の繋がりがああるテキストもあれば、まったく関連性のないテキストもある。講読の部分でイスマノアメリカをテーマとして扱うテキストが目立ったが、全体的にはスペイン関係の読み物が多かったりスペインしか扱っていないテキストもあった。日本を舞台にスキットを展開しているテキストも1冊ああるが、概して日本のスペイン語テキストが扱う場所はスペイン語圏のどこかであり、スペインであることが多い。

3.2.5. その他特記事項

全体を眺めた時にスペイン語圏の地域色を感じさせるテキストがある。あるものは表紙や各課にスペイン語圏の有名な土地、食べ物、建物、文化風習のカラー写真をたくさん掲載している。短いコラムの形で言語の多様性や特定の地域社会、異文化リテラシーについて説明しているテキストもある。講読やスキットに異なる国籍の人物を登場させ、その人物の出身地について語らせる場合もある。メキシコもしくはイスマノアメリカに焦点を当てる方針をまえがきで明言しているテキストもある。他方で、特定の地域色をあまり感じさせないテキストもある。写真やイラストが少ないとそう感じるのかもしれないと当初思っていたが、様々な固有名詞が例文や練習問題で出てきても全体としてスペイン語圏の地域色をあまり感じさせないテキストもあることに気づいた。

以上が日本のスペイン語テキストにおけるイスマノアメリカの扱いについて行った分析の結果である。最近のスペイン語のテキストではテキストの表紙から内容に至るまで、イスマノアメリカの多様な文化・社会を紹介するために以前よりは多くのページが割かれるようになっていたのは予想通りであり、特に意外性はない。

しかし、スペイン中心ではなくスペイン語圏という広大な世界を明示的に示すという意図を持ってテキストを編纂する場合、スペイン語圏の地図は大西洋をはさんでスペイン語圏の国々の実際の大きさや距離感がわかるものを選び、「vosotros, -as はスペインでしか使われない」と説明するほうが汎イスパニア的な世界を伝えるにはより効果的であると言える。ただし、日本人にとって覚えるのが大変な動詞の活用形は最初に6つ覚えて、相手がイスパノアメリカ人なら vosotros, -as の活用形を使わず ustedes の活用に変えればいいので、学生には最初から6つの活用形をすべて暗記させることを推奨すべきであろう。

イスパノアメリカのスペイン語の特徴として他に ll の発音や voseo の用法があるが、ll について特記事項はなく、voseo については、コラムなどでの言及しているテキストはあったが文法説明の場では扱われていない。voseo の活用形および tú, usted との使い分けの複雑さゆえに入門レベルのテキストで言及するのは不適切と思われるので、扱われていないのは適切であるとする考え方に筆者も同意する。

4. まとめ

1990年代以降、RAE や ASALE、セルバンテス協会は汎イスパニア主義と言語の多様性の両方を尊重する政策を明確に打ち出し、その頃から始めたネットの積極的な活用によってスペイン語圏の言語や文化の存在を世界に発信してきた。

日本のスペイン語教育も近年はイスパノアメリカの言語・文化・社会について以前よりは取り上げるようになったが、現在の RAE などが標榜する言語政策に比べると依然としてスペイン重視の傾向が感じられる。そこで、日本のスペイン語教育の場におけるスペイン語圏の扱いが現状を的確に反映しているか、大学入学前のスペイン語履修の勧め方や教室で使うテキストの内容分析を通して検証を試みたのが本稿である。

日本の大学でのスペイン語教育においては、学生が履修する前に汎イスパニア主義的な観点から多くの国々で使えるスペイン語の履修を勧め、また学生も同様の観点からスペイン語の有用性にひかれて学習を始める傾向がある。ところがスペイン語圏内の言語の多様性については、専攻学生であっても学習当初から十分な知識を持っている学生はそれほど多くない。

これが大学入学前の日本のスペイン語学習者の一般的な状況である。

次に、スペイン語を学び始める学生のおそらく利用するはずの入門レベルのテキストがイスパノアメリカをどのぐらい扱っているか近年の状況を調査したところ、イスパノアメリカの文化や社会は主に簡単な講読や文化コラムなどで扱われる傾向がみてとれた。しかしながら、スペイン語圏の言語の多様性については依然として扱いが不十分で、vosotros, -as の不使用に言及していないテキストが少なからずあり、スペインのスペイン語しか想定されていない状況があることがわかった。スペイン語圏の言語の多様性はスペイン語の履修者を増やすための宣伝に使われることもないので、スペイン語学習者は学習開始前も学習後も知らされる機会が思いのほか少ないことがわかる。また、スペイン語圏の言語規範は単一的、すなわちスペインのスペイン語が標準語というわけではなく、地域ごとに複数の規範が存在するという現状も、現在の日本のスペイン語入門レベルテキストでは言及されていないことが多く理解されにくい。スペイン語圏内の言語の多様性のあり方についてはテキストまたは教師が何らかの方法で学習者に対して示唆する必要がある。広大なスペイン語圏にはいくつかの地域バリエーションがあるが、日本のスペイン語教育においてカスティーリャ方言が他のスペイン語圏地域の方言よりも正統なものと考えられている傾向があることを Masuda (2019) は指摘している。ある言語圏内に複数の言語規範が存在するという状況は日本の学習者には想像しにくいところがあるが、現在のスペイン語圏が推進している言語政策であり、また言語や文化に関わる多様性のあり方への理解は今後の外国語学習にとって必要不可欠である。

今回の調査はテキスト分析が中心で、教師自身が現在のスペイン語圏の汎イスパニア主義と言語の多様性の双方をどのように学習者に伝えているか／伝えるべきかという問題にまで踏み込む余裕がなかった。今後の課題としたい。

注

- 1) スペイン語で el español neutro / global / internacional / común などと呼ばれるが、スペイン語圏で統一的な呼称がなく、江澤 (2019a) ではこの言語を便宜的に「汎用スペイン語」と名付けている。本稿でも同じ呼称を用いる。

- 近年スペインでは el español general という表現もよく用いられ、現 RAE 会長 Villanueva Prieto 氏が Panhispanismo を論じた Villanueva Prieto (2017) の中で使用しているが、“entre comillas”での使用であり、スペイン語での完全な用語定着には至っていない。
- 2) 江澤 (2019a: 187) を参照。
 - 3) 江澤 (2019a: 186-187) を参照。
 - 4) Panhispanismo は政治・経済・文化などの複数の側面からのスペイン語圏の連帯をあらわす用語であるが、本稿では主に言語面におけるスペイン語圏の連帯関係を指すことにする。
 - 5) 1992年には第1回スペイン語国際会議がスペインのセビーリャで開催され、同会議は以後3年に1度、スペイン語圏のどこかで開催されている。2019年はアルゼンチンのコルドバで開催された。
 - 6) RAE の *Ortografía* 1999年版、2010年版のいずれにもスペイン語圏のほか、アメリカやフィリピンにも存在する言語アカデミアの名称と設立年度の一覧が示されていて、このスペイン以外のアカデミアの歴史が意外にも古いことに気づかされる。2013年に赤道ギニアのアカデミアが加わり現在23の言語アカデミアがメンバーとなっている。
 - 7) Villanueva Prieto (2017) を参照。
 - 8) RAE の Web サイト内にある *Diccionario panhispánico de dudas* のコンテンツを参照。 <https://www.rae.es/recursos/diccionarios/dpd>
 - 9) Real Academia Española (2010) を参照。
 - 10) CVC 内の4つの部門のうちの1つである Lengua のページ <https://cvc.cervantes.es/lengua/default.htm> を参照。各刊行物へのリンクが貼られている。
 - 11) Fisac (2000) および Bando y Ueda (2014) を参照。
 - 12) Instituto Cervantes (2019: 5) を参照。この報告書は毎年10月に公表される。なお、この話者数の数字は毎年少しずつ増加している。
 - 13) 江澤 (2019a: 185-187)、特にスペイン語国際会議に言及した個所を参照。
 - 14) Instituto Cervantes の Web ページ内にある “¿Cuál es la diferencia entre SIELE y DELE?” を参照。
 - 15) スペイン語圏全域で実施する語学検定試験で使われるスペイン語における多様性と汎用性について、現時点で筆者はまだあまり多くの情報を得ていない。今後の検討課題のひとつである。
 - 16) ASELE の会議録 (Balmaseda Maestu *et al.* (eds.)) (2017) およびここに掲載された Regueiro Rodríguez (2017) を参照。
 - 17) 文部科学省により2年に1度実施されているこの調査でスペイン語は前回4位だったドイツ語と順位を入れ替えたがその差はわずかである。
 - 18) 愛知県立大学では高等学校教諭一種免許状 (スペイン語) の取得が可能で

あるが、英語以外の外国語ではその言語での教育実習受入校を探すのが難しいので、英語で教育実習に代替することが認められている。本学のある学生がネット検索などにより情報を得て愛知県周辺の高等学校でスペイン語を開講していそうな複数の学校に問い合わせたが、回答なし・不開講・教師が非常勤のため受け入れ不可・その学校の出身者のみ受け入れる、などの理由によりスペイン語で教育実習をしたいという希望は叶わなかった。英語以外の外国語に関する高大連携を促進する一つの鍵となるのがこの教育実習生受入れの問題であり、今後の状況改善を望みたい。

- 19) 愛知県立大学公式 Web サイト内にある外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻の紹介ページより。
- 20) Instituto Cervantes (2019: 7) を参照。スペイン国内の母語話者の割合は91.9%で、限定的な語学能力保持者が370万人とのことで、地域語の母語話者数の算入方法が不明な点もあるが、「10人に1人だけ」という解釈はおそらくそれほど見当外れではないように思われる。
- 21) GIDE (2012: 22-23) を参照。以下の質問 [A] への回答についても同様。
- 22) 江澤 (2019b) を参照。このテキストに関する調査はTADESKA (関西スペイン語教授法ワークショップ) の活動の一環でもある。TADESKA の今年度のテーマ「教科書研究」に沿って「汎用スペイン語」研究の中で外国語としてのスペイン語用テキストの望ましいあり方を考える機会をいただいた。当日貴重なご意見を下さった参加者の皆様に心から御礼申し上げたい。
- 23) 大学生向けスペイン語テキストを出版している会社は筆者が知る限り8社であるが、今回のテキスト抽出の条件が、最近5年間で初版が出版された入門レベルテキストであったため、該当するのは6社のテキストであった。
(本研究はJSPS 科研費JP18K00786の助成を受けたものです)

参考文献・web サイト (テキストの情報は巻末の表を参照)

- 安藤真次郎他 (2013) 「日本のスペイン語教育の課題と展望—今、教師としてできることは何か—」『イスパニカ』57, 日本イスパニヤ学会, 1-25.
https://doi.org/10.4994/hispanica_2013.1
- Balmaseda Maestu, Enrique *et al.*(eds.) (2017) *Panhispanismo y variedad en la enseñanza del español L2-LE*, Actas del Congreso Internacional de ASELE, Fundación San Millán de la Cogolla.
<https://recipp.ipp.pt/bitstream/10400.22/10437/1/Panhispanismo%20y%20variedades%20en%20la%20ense%C3%B1anza%20del%20espa%C3%B1ol%20L2-LE.pdf>
- Bando, S. y H. Ueda (2014) “Andanzas del hispanismo en Japón” en VV.AA. (2014)

- El español en el Mundo, Anuario del Instituto Cervantes 2014*, Madrid: Instituto Cervantes.
https://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_14/default.htm
- 江澤照美 (2019a) 「ELE 教育における「汎用スペイン語」」『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』51号、183-194.
https://aichi-pu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=3878&file_id=22_no=1
- (2019b) 「汎用的なスペイン語習得のための ELE テキスト」第128回 関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 報告
<http://tadeska.sakura.ne.jp/JPActas.htm/129/201906ezawa01.pdf>
- Fisac, Taciana (2000) “La enseñanza del español en Asia Oriental” en VV.AA. (2000) *El español en el Mundo, Anuario del Instituto Cervantes 2000*, Madrid: Instituto Cervantes.
https://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_00/default.htm
- García Santa-Cecilia, Álvaro (2019) “La enseñanza de las lenguas en la globalización: nuevas perspectivas de la condición posmétodo”, *Actas del II Congreso de Español como Lengua Extranjera del Magreb (CELEM) del Instituto Cervantes de Casablanca* (2017), 5-11.
https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/publicaciones_centros/casablanca_2017.htm
- GIDE (2012) *Cuestionario sobre análisis de necesidades aplicado a los alumnos universitarios japoneses de español*, Grupo de Investigación de la Didáctica del Español (GIDE), Tokio.
- Instituto Cervantes (2019) *El español: una lengua viva Informe 2019*, Instituto Cervantes.
https://cvc.cervantes.es/lengua/espanol_lengua_viva/pdf/espanol_lengua_viva_2019.pdf
- Masuda, Kenta (2019) “Desafíos y perspectivas ante el panhispanismo lingüístico: una revisión crítica sobre su aplicación didáctica en el ámbito de E/LE”, *Cuadernos CANELA* 30, Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana, 85-97.
<https://dialnet.unirioja.es/descarga/articulo/7007455.pdf>
- Real Academia Española (2010) *Ortografía de la Lengua Española*, Espasa, Madrid.
- Regueiro Rodríguez, María Luisa (2017) “El profesor de ELE y la didáctica del léxico hispanoamericano: Comprensión frente a infortunio comunicativo”, Balmaseda Maestu, E. et al. (eds.) (2017) *Panhispanismo y variedad en la enseñanza del español L2-LE*, *Actas del Congreso Internacional de ASELE*, Fundación San Millán

de la Cogolla, 79–96.

Villanueva Prieto, Darío (2017) “El panhispanismo de la RAE y de ASALE” en VV. AA. (2017) *El español en el Mundo, Anuario del Instituto Cervantes 2017*, Madrid: Instituto Cervantes.

https://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_17/default.htm

Asociación de Academias de la Lengua Española (ASALE)

<https://www.asale.org/>

Diccionario panhispánico de dudas (Web 版)

<https://www.rae.es/recursos/diccionarios/dpd>

Instituto Cervantes

“¿Cuál es la diferencia entre SIELE y DELE?”

<https://www.cervantes.es/imagenes/file/lengua/evaluaycertifica/diferencias-examenes-ic-dele-siele.pdf>

Real Academia Española (RAE)

<https://www.rae.es/>

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻紹介ページ

https://www.aichi-pu.ac.jp/academics/foreign_studies/european_studies_spain/index.html

文部科学省 (2019) 「高等学校等における英語以外の外国語科目の開設状況について (平成30年5月1日現在)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/08/_icsFiles/afieldfile/2019/09/19/1420498_001_1.pdf

スペイン語における汎イスパニア主義と多様性

表：今回比較対象のために使用したテキスト一覧

	初版発行年	著者名	書籍名	出版社
1	2015	浦／バルティダ	¡Imagínatelo! (イラストで楽しもう、スペイン語！)	A
2	2015	濱松／アルマラス／ 安富	Español con tomate (五感でめぐるスペイン語)	A
3	2015	内田千重子	¡Por supuesto! (もちろん！ スペイン語)	D
4	2015	久住／ラマドリッド	¡Ándale! (アングレ！)	D
5	2015	有田美保	Paso doble Primer paso	K
6	2015	西川喬	Fundamentos del idioma español Paso a paso (基礎から学ぶスペイン語 ス テップバイステップ)	K
7	2016	青砥清一	Patio español — aprender a escribir en español desde cero (パティオ・エスパ ニョールーゼロから学ぶスペイン語ラ イティング)	A
8	2016	ラグ他	¡Nos gusta! 1 Gramática para hablar (発見！ 大好き!! スペイン語!!! 1)	A
9	2016	宇野／平井／Letelier	IDEAL (イデアル)	D
10	2016	後藤雄介	¡Lógico! Curso básico de la lengua española (ロヒコ！—ロジカルに学ぶスペイン 語)	D
11	2016	Planas 他	Estudio 1 Tv (楽しく覚えるスペイン語)	DTP
12	2016	山村ひろみ	24 lecciones de español (スペイン語24課)	H
13	2016	寺沢／高山	¡Ánimo con el español! (アニモ・コン・エル・エスパニョー ル スペイン語をはじめよう！)	S
14	2017	岡田／那須	Espigueta — primer curso de español — (エスピギーター実りのスペイン語—)	A

15	2017	福森他	Gramañol Estudio sintético de la lengua española a través de la gramática (グラマニョール 文法中心スペイン語総合学習教本)	A
16	2017	阿由葉他	Mi camino (ミ カミーノ)	D
17	2017	西川喬	Aula del español para aprender los fundamentos del idioma (基礎から学ぶスペイン語教室)	D
18	2017	仲井／アルバレス	Primer paso al español edición compacta (〈コンパクト〉はじめてのエスパニョール)	S
19	2018	木越勉	Dominio del español (どみなーる ドリル・文法・音読からのスペイン語マスター)	A
20	2018	サンス／青砥	¡Acércate! (アセルカテ！ スペイン語に親しむ16講)	A
21	2018	福崙／ロメロ	Recorrido por el Patrimonio de la Humanidad en español (世界遺産で学ぶスペイン語)	A
22	2018	モヤノ／ガルシア／廣康	¡Muy bien! Curso de español 1 (いいね！ スペイン語)	A
23	2018	柿原／土屋	Español superrápido (超初級！ まずは話してスペイン語)	DTP
24	2018	下田幸男	Recorrido en español por Kioto (スペイン語で巡る京都)	H
25	2019	木村琢也	¡Así suena! (響く音！ スペイン語)	A
26	2019	デルプラド／齋藤／中道	Español en imágenes (イメージ・スペイン語)	A
27	2019	廣澤明彦	El español: gramática y ejercicios (スペイン語 文法と練習)	H

A：朝日出版社 D：同学社 DTP：DTP出版 K：弘学社 H：白水社 S：三修社
(注 ELEテキスト出版社は他にもあるが、2015年以降初版出版の入門レベルテキストに限定した)

El panhispanismo y la variedad en el español — para el estudio del “español panhispánico”

Terumi EZAWA

Desde la década de 1990, la RAE y el Instituto Cervantes han hecho un amplio uso de Internet y han comenzado a mostrarle al público un mundo de habla hispana que combina el panhispanismo y la diversidad lingüística.

Y la enseñanza de E/LE en Japón ha llegado a tratar los asuntos de Hispanoamérica más que antes, pero todavía hay una impresión de que las introducciones de la lengua y cultura españolas representan una gran proporción de las clases de nivel elemental. Por lo tanto, investigamos el contenido de la introducción del mundo hispano para estudiantes que empiecen a estudiar español en universidades japonesas y el de los materiales didácticos de E/LE.

Nuestra conclusión es que la enseñanza de E/LE en Japón introduce el panhispanismo que actualmente se promueve en los países de habla hispana como una ventaja de aprender español. Por otra parte, aún no se han introducido tanto la diversidad de idiomas y los elementos socioculturales de Hispanoamérica en los materiales didácticos.